Journal of Medical English Education
年3回2月・6月・10月発行　第11巻第2号 2012年6月1日発行
ISSN 1883-0951

Journal of Medical English Education

Vol.11
No.2
6
2012

第15回日本医学英語教育学会 学術集会プログラム・抄録集

会期 / Date

2012年7月21・22日（土・日）

会長 / President

安藤千春 / Chiharu Ando
獨協医科大学医学部 特任教授

会場 / Venue

ホテルグランドヒル市ヶ谷 /
Hotel Grand Hill Ichigaya
〒162-0845　東京都新宿区市谷本村町4-1
4-1 Ichigaya-hommuracho, Shinjuku-ku,
Tokyo 162-0845, Japan

Official Journal of the Japan Society for Medical English Education （JASMEE）

Vol.11
No.2
6
2012

Journal of Medical English Education

第15回日本医学英語教育学会 学術集会プログラム・抄録集

会期 / Date

2012年7月21・22日（土・日）

会長 / President

安藤千春 / Chiharu Ando
獨協医科大学医学部 特任教授

会場 / Venue

ホテルグランドヒル市ヶ谷 /
Hotel Grand Hill Ichigaya
〒162-0845　東京都新宿区市谷本村町4-1
4-1 Ichigaya-hommuracho, Shinjuku-ku,
Tokyo 162-0845, Japan

Official Journal of the Japan Society for Medical English Education （JASMEE）

Journal of Medical English Education

The official journal of the Japan Society for Medical English Education

jasmee@medicalview.co.jp

Executive Chair, JASMEE Publications

西澤　茂

Shigeru Nishizawa, Fukuoka

Editor-in-Chief

Reuben M. Gerling, Tokyo

Japanese Editor

Toshimasa Yoshioka, Tokyo

Editorial Executive Board

Chiharu Ando, Tochigi
J. Patrick Barron, Tokyo
Isao Date, Okayama
Yoshitaka Fukuzawa, Aichi
Reuben M. Gerling, Tokyo
Haruko Hishida, Tokyo
Masahito Hitosugi, Tochigi
Masanori Ito, Chiba
Clive Langham, Tokyo
Timothy Minton, Tokyo
Tsukimaro Nishimura, Kanagawa
Minoru Oishi, Tokyo
Tsutomu Saji, Tokyo
Masako Shimizu, Kanagawa
Kinko Tamamaki, Hyogo
Toshimasa Yoshioka, Tokyo

Editorial Board

Reuben M. Gerling, Tokyo
Toshimasa Yoshioka, Tokyo
Clive Langham, Tokyo
Saeko Noda, Tokyo

Review Editors

Raoul Breugelmans, Tokyo
Ruri Ashida, Tokyo
Eric Hajime Jego, Tokyo
Takayuki Oshimi, Tokyo
Jeremy Williams, Chiba

Former Editors-in-Chief

大井静雄

Shizuo Oi, M.D., 2000–2004

Nell L. Kennedy, Ph.D., 2004–2008

Executive Adviser Emeritus

植村研一

Kenichi Uemura, M.D.

ー目　次ー

会長挨拶 …… 4
ご案内 …… 6
講演規定 …… 8
宿泊のご案内 …… 9
交通のご案内 …… 10
会場案内図 …… 11
7月21日（土）第1日目プログラム …… 14
7月22日（日）第2日目プログラム …… 15

7月21日（土）抄録集 …… 17
シンポジウム：日本医学英語検定試験の現状と展望 …… 18
ワークショップ： EMP Lesson Plans : PechaKucha Style Presentation …… 23
一般演題1《医学英語教育プログラム》 …… 24
一般演題2《実践的医学英語教育》 …… 25

7月22日（日）抄録集 …… 27
特別講演：国際貢献と医学英語 …… 28
一般演題3《国際的活動》 …… 30
一般演題4《医学英語読解・ライティング指導》 …… 31
一般演題5《医学英語研究》 …… 32

第8回 Kenichi Uemura Award（植村研一賞）授賞式 …… 33
日本医学英語教育学会 学術集会　一覧 …… 35

会長挨拶

第15回日本医学英語教育学会学術集会を開催する運びとなりました。東京都内での開催は今回で3回連続となりましたが、第15回日本医学英語教育学会学術集会会長を拝命する以前から、メジカルビュー社の所在地である市ヶ谷にてどうしても開催したい思いを実現することができ、とても嬉しく存じます。本学会にご参加いただくために遠路いらしていただいたことに感謝申し上げます。

今回の学術集会では，本学会の主要活動の一つである日本医学英語検定試験（医英検）の重要性をさらにご理解いただくため、医英検を中心とするプログラムを構成いたしました。シンポジウムにおいて，過去5年間の経緯と現状を概観いたします。皆様におかれましては一層のご理解とご協力をいただければ幸いです。

その他にも，特別講演として小川由英先生をお招きし，『国際貢献と医学英語』という演題でお話しいただきます。また『論文読解力養成のレッスンプラン』という興味深いワークショップもございますので，奮ってご参加ください。

最後になりましたが，第15回学術集会を開催するにあたり，事務局の方々，特に江口潤司氏にこの誌面をお借りして心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

第15回日本医学英語教育学会学術集会
会長　**安藤　千春**
（獨協医科大学医学部特任教授）

Greetings from the President

Welcome to Ichigaya for the Fifteenth Annual Conference of the Japan Society for Medical English Education. This is the first time the JASMEE conference is held in Ichigaya. First of all, let me thank Medical View for their consent to hold this meeting.

I know that many of you will have traveled from quite a distance and I'd like to thank those who will have made this long trip to participate in the largest, most extensive JASMEE conference ever. Thank you very much for participating.

At this conference, we shall review the current state of the Examination of Proficiency in English for Medical Purposes; its performance since our last conference at Tokyo Women's Medical University in 2011 and for the next 5 years.

Plans for this issue have all the details of the specific events. We have some interesting programs planned for each day of the conference including the opening banquet and the keynote speaker, Dr. Yoshihide Ogawa, the following day.

I know most of you are already members of JASMEE but for those of you who aren't, I urge you to fill out a membership application so that you can join all of us in the profession and help advance the course of medical English education.

To all of you, thank you for coming, welcome, and I am sure you will enjoy the conference.

Chiharu Ando
Adjunct Professor
School of Medicine
Dokkyo Medical University
President
The 15th Annual Conference of the JASMEE

ご案内

1 会期／Dates

2012年7月21日（土）～22日（日）

2 会場／Venue

ホテルグランドヒル市ヶ谷
〒162-0845　東京都新宿区市谷本村町4-1
TEL：03-3268-0111（代表）

3 受付／Registration

・参加登録，演者登録，新入会・年会費，懇親会の申込み・お支払いなどは，すべて3階「受付」で行います。
・受付開始時刻は7月21日（土）9:00，7月22日（日）9:00です。

4 参加登録／Registration Fees

・参加費は一般会員8,000円，学生会員4,000円，非会員10,000円です。
　＊2日目のみご参加の場合は，非会員5,000円となります。
・会期中は必ず参加証をつけてください。

5 入会申込・年会費納入

・参加登録時に「新入会・年会費受付」にて行ってください。
・平成24年度の年会費は9,000円（年3回発行の学会誌購読料を含む）です。
　学生会員の場合の年会費は1,000円（学会誌購読料を含まない）です。

6 会場内の呼び出し

・会場内での呼び出し，および緊急連絡は受付までご連絡ください。

7 ドリンクサービス，食事

・会期中，3階 翡翠の間ではコーヒーサービスがございます。
・ホテル内のレストラン・喫茶の営業時間は下記の通りです。
　Restaurant「サルビア Salvia」朝食 7:00～10:00（和洋バイキング 1,050円），
　　昼 11:30～14:30，夜 17:00～22:00
　Tea Room/Bar「カトレア CATTLEYA」ティー・ラウンジ 9:00～12:00，バー 17:00～22:00

8 関連会議日程

日本医学英語検定試験制度委員会	7月20日(金) 14:00～17:00	メジカルビュー社5階・会議室
理事会	7月20日(金) 18:00～20:00	メジカルビュー社5階・会議室
評議員会	7月21日(土) 9:30～10:00	3階 瑠璃の間
総会	7月21日(土) 12:30～13:30	3階 瑠璃の間
学会誌編集委員会	7月22日(日) 11:30～12:30	メジカルビュー社5階・会議室

9 懇親会／Reception

・懇親会は7月21日(土)18：30より，3階 真珠の間にて開催いたします。参加費は8,000円です。

10 展示会場

・（株）アルク/（株）アルク教育社，株式会社メジカルビュー社から協賛をいただき開催しております。会期中は，3階 翡翠の間を展示会場として，協賛各社の展示を行います。ぜひお立ち寄りください。

11 第16回 日本医学英語教育学会 学術集会のご案内

・会期　2013年7月20，21日（予定）
・会場　東京ベイ舞浜ホテル・クラブリゾート（予定）
・会長　伊藤 昌徳（順天堂大学医学部附属浦安病院　脳神経外科　教授）

12 第17回 日本医学英語教育学会 学術集会のご案内

・会期　2014年7月19，20日（予定）
・会長　西村 月満（北里大学　一般教育部　教授）

講演規定

・演者は発表予定時刻の30分前までに「受付」で演者登録をお済ませください。

・演者登録後，発表予定時刻の10分前までに発表会場の「次演者席」へご着席ください。

[1] 口演時間は15分，討論時間は演者の交代を含めて5分です（時間厳守でお願いします）。
14分に予告ベル1回，15分に終了ベル2回でお知らせします。

[2] 発表はすべて液晶プロジェクターを用いたPowerPointでお願いいたします。
会場で使用できるコンピュータのOSはWindows 7（アプリケーションはPowerPoint 2010）です。
Macintoshの使用をご希望の方は事前にご相談ください。
発表者はファイルに「発表者氏名」を明記のうえ，7月11日（水）までに学会用メールアドレス（jasmee@medicalview.co.jp）に添付ファイルとして送付してください。
またバックアップ用として，当日USBメモリースティックでもご持参いただくことをお薦めいたします。
PCの持ち込みによる発表はお控えください。
いただきました発表データは，学会終了後に責任をもって消去いたします。。

[3] ハンドアウトを使用して発表される場合は，事前に各自でフォトコピーを100部ご用意ください。
演者登録の際，必ずコピーを受付の係員にお渡しください。

[4] 発表を取り消される場合は，事前にお知らせ下さい。
ご質問などございましたらご遠慮なくメール（jasmee@medicalview.co.jp）あるいは電話（03-5228-2274）でご連絡ください。

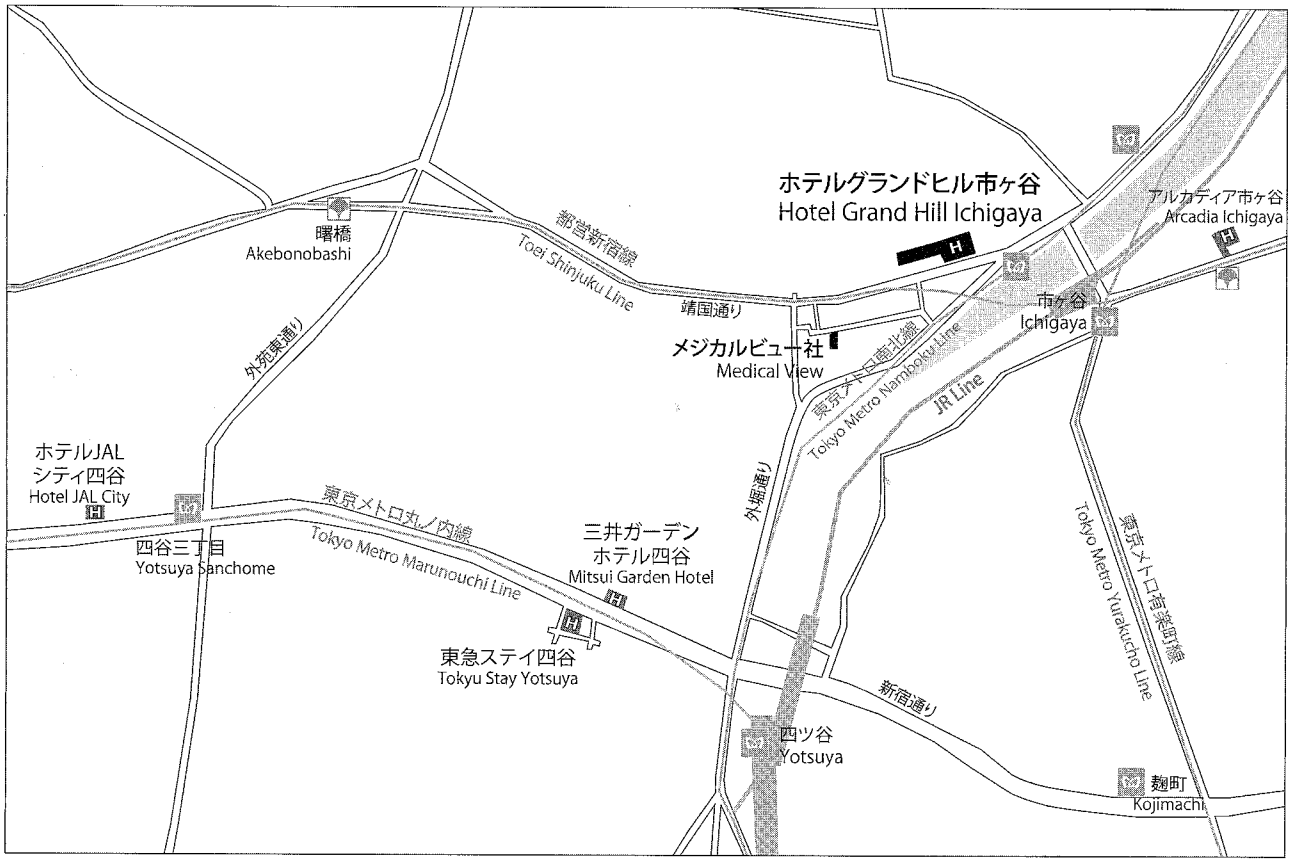
[5] 学会当日に急遽，発表を取り消される場合は，発表予定時刻の1時間前までに「受付」にお知らせください。

・質問・発言を希望される方はその場で挙手をお願いします。係の者がマイクを持って参りますので，マイクを持ってお話しください。

・発言は座長の指名順とし，発言の前には所属・氏名を名乗ってください。

宿泊のご案内

最寄駅	ホテル名	住所／ＴＥＬ	アクセス	宿泊料金
市ヶ谷	グランドヒル市ヶ谷	〒162-0845　新宿区市谷本村町4-1 TEL 03-3268-0111	JR / 地下鉄 市ヶ谷駅より徒歩3分	¥11,000～ 15,000
市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷 私学会館	〒102-0073　千代田区九段北4-2-25 TEL 03-3261-9921	JR / 地下鉄 市ヶ谷駅より徒歩2分	¥9,500～ 11,200
四ツ谷	三井ガーデンホテル四谷	〒160-0004　新宿区四谷1-24 TEL 03-3358-1131	JR / 地下鉄 四ツ谷駅より徒歩3分	¥10,700～ 13,400
四ツ谷	東急ステイ四谷	〒160-0004　新宿区四谷2-1 TEL 03-3354-0109	JR / 地下鉄 四ツ谷駅より徒歩3分	¥9,400～ 11,600
四ツ谷	ホテルJALシティ四谷	〒160-0004　新宿区四谷3-14-1 TEL 03-5360-2580	地下鉄 丸ノ内線 四谷三丁目駅より 徒歩1分	¥10,400～ 17,800
御茶ノ水	東京ガーデンパレス	〒113-0034　文京区湯島1-7-5 TEL 03-3813-6211	JR / 地下鉄 御茶ノ水駅より徒歩5分	¥8,900～ 11,500
御茶ノ水	お茶の水セントヒルズ ホテル	〒113-0034　文京区湯島2-1-19 TEL 03-3831-0081	JR / 地下鉄 御茶ノ水駅より徒歩5分	¥9,345～ 11,650
御茶ノ水	お茶の水イン	〒113-0034　文京区湯島1-3-7 TEL 03-3813-8211	JR / 地下鉄 御茶ノ水駅より徒歩3分	¥8,600～ 12,000
御茶ノ水	お茶の水ホテルジュラク	〒101-0063　千代田区神田淡路町2-3 TEL 03-3251-7222	JR / 地下鉄 御茶ノ水駅より徒歩3分	¥7,500～ 13,700



交通・宿泊のご案内

【会場／ Venue】

ホテルグランドヒル市ヶ谷／ Hotel Grand Hill Ichigaya

〒 162–0845　東京都新宿区市谷本村町 4-1 ／ 4-1 Ichigaya-hommuracho, Shinjyuku-ku, Tokyo 162-0845
Phone 03–3268–0111

JR 総武線　　市ヶ谷駅（各駅停車，徒歩約 5 分）
地下鉄　　市ヶ谷駅（東京メトロ有楽町線／南北線，地下鉄新宿線，7 番出口から徒歩約 2 分）

JR Sobu Line　　ICHIGAYA Station（Local trains only;5minutes' walk）
Subway　　ICHIGAYA Station（Exit #7;2minutes' walk）
　Tokyo Metro:　Yurakucho Line（Y14）or Namboku Line（N09）
　Toei Line:　Shinjuku Line（S04）

［東京駅から］（約 15 分）

東京駅 → 御茶ノ水 → 市ヶ谷
JR 中央線　JR 総武線（中野・三鷹方面）

［羽田空港から］（約 50 分）

羽田空港 → 浜松町 → 秋葉原 → 市ヶ谷
東京モノレール　JR 山手線（東京・上野方面）　JR 総武線（中野・三鷹方面）

羽田空港 → 品川 → 秋葉原 → 市ヶ谷
京浜急行　JR 山手線（東京・上野方面）　JR 総武線（中野・三鷹方面）

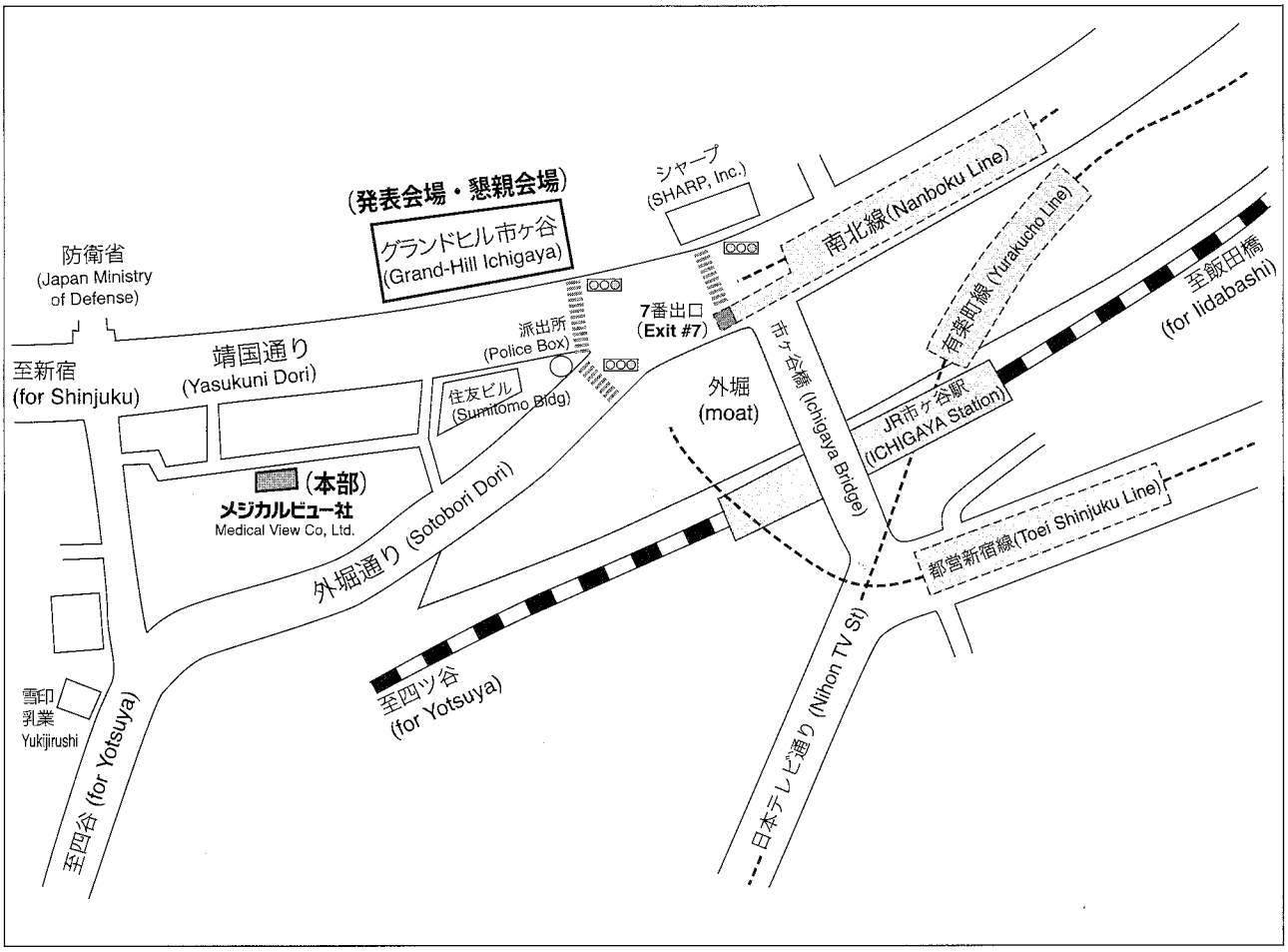
［From Tokyo Station］（15 minutes）

TOKYO → OCHANOMIZU → ICHIGAYA
JR Chuo　JR Sobu（for Nakano/Mitaka）

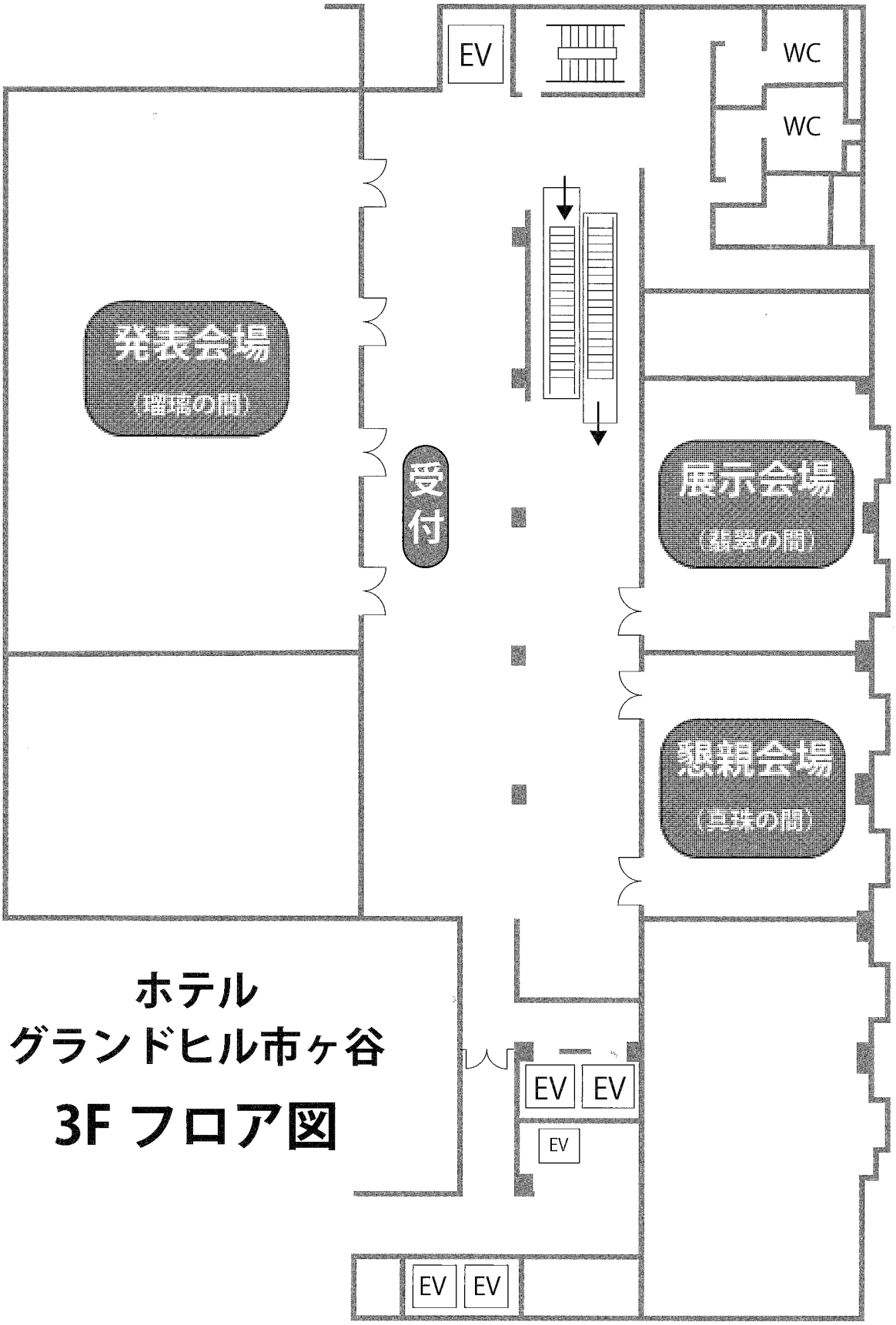
［From HANEDA Airport］（50 minutes）

HANEDA AIRPORT → HAMAMATSUCHO → AKIHABARA → ICHIGAYA
Monorail　JR Yamanote（for Tokyo/Ueno）　JR Sobu（for Nakano/Mitaka）

HANEDA AIRPORT → SHINAGAWA → AKIHABARA → ICHIGAYA
Keihin Kyuko　JR Yamanote（for Tokyo/Ueno）　JR Sobu（for Nakano/Mitaka）



会場案内図



ホテル
グランドヒル市ヶ谷
3F フロア図

プログラム

7月21日（土）第1日目プログラム

7月22日（日）第2日目プログラム

7月21日（土）第1日目プログラム

発表会場（3階 瑠璃の間）

930–1130

評議員会

1000–1130

ワークショップ：EMP Lesson Plans : PechaKucha Style Presentation

Takayuki Oshimi,
Eric Hajime Jego,
Daniel Salcedo,
Jeanette Dennisson,
James Thomas

1230–1430

総会

1300–1310

開会挨拶

1310–1430

一般演題1《医学英語教育プログラム》座長：小島多香子（東京女子医科大学），Christopher Holmes（東京大学）

1. A Proposal Regarding English Education at Schools to Train Paramedics/Medical Technologists in Japan
   神崎秀嗣（京大ウイルス研細胞生物）
2. Effects of Extensive Reading on Medical Students' Reading Proficiency, Reading Strategies, and Learning Strategies
   大下晴美（大分大学医学部）
3. Creating a New Clinical Medicine English Program
   Alan Hauk（東邦大学医学部医学科英語学研究室）
4. Clinical and Cellular Perspectives of Medical English Education in Japan
   Najma Janjua（香川県立保健医療大学）

1450–1610

一般演題2《実践的医学英語教育》座長：野田小枝子（津田塾大学），Clive Langham（日本大学）

1. Assessing a Scientific English Course with Portfolios and Poster Presentations
   Christine Kuramoto（Kyushu University, Department of Medical Education），他
2. Supplementing Medical English Instruction with Automated Classroom Lecture Recording
   Najma Janjua（香川県立保健医療大学）
3. Experiments in Extracurricular Teaching: The Case of Skills Lab English
   James Hobbs（Iwate Medical University, Center for Liberal Arts and Sciences）
4. 看護学生向け「医学英語検定」科目の経年評価
   杉本なおみ（慶應義塾大学），鈴木美保（恩賜財団済生会横浜市東部病院）

1630–1740

シンポジウム：日本医学英語検定試験の現状と展望

座長：西澤　茂，安藤千春

1. 日本医学英語検定試験の自己評価について
   一杉正仁（医英検解析評価小委員会委員長，獨協医科大学法医学講座）
2. 日本医学英語検定試験（医英検）普及のための施設受験の取り組み：岡山大学の場合
   伊達　勲（副理事長，岡山大学医学部脳神経外科）
3. 日本医学英語検定試験（医英検）2級実施にあたって
   伊藤昌徳（医英検制度委員長，順天堂大学医学部附属浦安病院脳神経外科）

展示会場（3階 翡翠の間）

900–1800

展示

3F 真珠の間

1800–1815

第8回植村研一賞授賞式

1815–2000

懇親会

7月22日（日）第2日目プログラム

発表会場（3階 瑞鶴の間）

920
一般演題3《国際的活動》 座長：五十嵐裕章（河北総合病院），Timothy Minton（慶應義塾大学）

1. **島根大学医学部における「ニュージーランド海外医学・看護研修」の実践報告**
   岩田 淳（島根大学医学部医療社会文化学講座）
2. **Training Future Doctors for Overseas Clinical Clerkships at Toho University**
   Daniel Salcedo（Nihon University School of Medicine）
3. **EMP Education in Germany — Results of a Preliminary Survey**
   Daisy Rotzoll（University of Leipzig, Dept. of Medical Education, LernKlinik Leipzig），et al
4. **The Rise of Asian ELF（English as a Lingua Franca and Its Role in Medical English Education**
   Michael Guest（Univ. of Miyazaki, Faculty of Medicine）

1040

1100

特別講演「国際貢献と医学英語」
座長：植村研一（松戸市病院事業）
講演者：小川由英（東京西徳洲会病院）

1200

1300
一般演題4《医学英語読解・ライティング指導》 座長：福澤嘉孝（愛知医科大学），Christine Kuramoto（九州大学）

1. **A Prescription for Clarity and Consistency in EMP**
   Ian Willey（香川大学 大学教育開発センター）
2. **医科学・生命科学系大学院におけるProgress Reportの指導**
   幸重美津子（京都大学再生医科学研究所）
3. **Lead, Follow, and Get Out of the Way**
   Kenneth Nollet（福島県立医科大学輸血・移植免疫学講座），他
4. **講師の専門領域に合わせたインタラクティブな論文抄読演習**
   久留友紀子（愛知医科大学医学部），他

1420

1440
一般演題5《医学英語研究》 座長：伊藤昌徳（順天堂大学），鈴木光代（東京女子医科大学）

1. **The One-or-Two-Letter and Three-Letter Words**
   Christopher Holmes（University of Tokyo Faculty of Medicine）
2. **ライフサイエンス・医療系の研究論文のムーブ分析とe-learning への応用**
   スミス朋子（大阪薬科大学），野口ジュディー津多江（武庫川女子大学薬学部）
3. **学術論文コーパスを利用した専門的語彙リスト作成の試み**
   藤枝美穂（京都医療科学大学）

1540
1550
閉会挨拶

展示会場（3階 翡翠の間）

900
展示
1500

7月21日(土)抄録集

シンポジウム：
日本医学英語検定試験の現状と展望 …… 18

ワークショップ：
EMP Lesson Plans：
PechaKucha Style Presentation …… 23

一般演題 1《医学英語教育プログラム》…… 24

一般演題 2《実践的医学英語教育》…… 25

【シンポジウム】
日本医学英語検定試験の現状と展望

座長
西澤　茂
（産業医科大学脳神経外科）
安藤千春
（獨協医科大学）

1．日本医学英語検定試験（医英検）の自己評価について

一杉正仁（医英検解析評価小委員会委員長・獨協医科大学法医学講座）

2．日本医学英語検定試験（医英検）普及のための施設受験の取り組み：岡山大学の場合

伊達　勲（副理事長，岡山大学医学部脳神経外科）

3．日本医学英語検定試験（医英検）2級実施にあたって

伊藤昌徳（医英検制度委員長，順天堂大学医学部附属浦安病院脳神経外科）

1. 日本医学英語検定試験（医英検）の自己評価について

一杉正仁
（医英検解析評価小委員会委員長，獨協医科大学法医学講座）

医学・医療の現場で必要とされる実践的な英語運用能力を総合的に評価する目的で，日本医学英語教育学会による日本医学英語検定試験（以下医英検と略す）が開始された。2008年4月に第1回試験が開始され，本年で5回を終えたことになる。演者らは，良質な試験が公平に実施されるように様々な取り組みを行ってきたが，自己評価の現状を報告する。

1）運営組織

医英検の運営に主として取り組むべく，医英検制度委員会を発足させた。本試験の実施前から学会内で有識者が集まり，試験内容や実施方法の妥当性について十分な議論を行った。その後，同制度委員会の下に問題作成小委員会と解析評価小委員会を設立した。これは，より公平かつ中立な立場で評価や解析を行うという姿勢を反映してのことである。問題作成小委員会では，妥当な量でかつ良質の問題を作成することを主たる目的とする。また，解析評価小委員会では，問題の質・量及び学問的妥当性について，受験者の成績と主観評価を併せて検討する。そして，それを制度委員会に報告することで，さらに作成委員会にフィードバックできるシステムになっている。このように，制度委員会内で，PDCAサイクルが実践されている。

2）試験の評価

まず，試験問題自体が，実践的な医学・医療英語運用能力を評価するのに妥当であるかを確認している。短文や長文を解釈する，さらに与えられた命題を解決するという問題解釈型（Taxonomy II型），問題解決型（Taxonomy III型）の出題は，真の理解力を問ううえで重要である。さらに，医学・医療現場で用いられる図表や現場の写真などを加えることは，実践的能力を確認するうえで欠かせない。医英検では，これらの問題を十分量含むことを心掛けている。

次に，受験者の正答率や識別指数といった客観的評価およびアンケートなどによる主観的評価結果をもとに，質を高める取り組みを行っている。2回のパイロット試験のみならず，本試験実施後も評価を続けているが，平均得点率は62.2～74.5％，平均識別指数は0.32～0.46と良好な値を保っている。

3）省庁指針に則った自己評価

社会的観点から公平性と中立性が確保されるように配慮している。文部科学省が平成20年10月に公表した「検定試験評価ガイドライン（試案）」および自己評価シートに基づいて，実施主体，試験の内容，実施手続き等について継続的に運用状況を確認している。医英検の実施状況は，このガイドラインに十分準拠したものであり，社会的信頼度は高いと考える。

医英検は，医学英語教育における目標設定として有用であり，また，国際化時代にふさわしい医師・医療従事者たる資格として利用できる。多くの医療従事者が，医英検を利用してスキルアップに努めて頂くと共に，各専門分野の成果が世界に広く周知されることを期待している。

2. 日本医学英語検定試験（医英検）普及のための施設受験の取り組み：岡山大学の場合

伊達　勲
（副理事長，岡山大学医学部脳神経外科）

医英検普及を目的に，今年から施設受験が可能となった。原則15名以上の受験者が集まれば，そこに受験会場が設置できる。

これを受けて，岡山大学医学部で是非，施設受験を実施しようと努力した。1）岡山は中国四国の交通の要所であり，他の地域からも受験生が集まりやすい，2）医学部，歯学部，保健学科の学生が多く学び，附属病院に医師及び多くの医療関係者が勤務しているので，施設受験が始まれば，毎年一定数の受験生を得られる，などが施設受験を推し進める私の動機付けである。

具体的に行ったのは，1）脳神経外科の若手医師，中堅医師に，受験を勧めた。2）他の診療科では，医学英語の担当医を通じて，若手医師に受験を勧めた。3）新しい研修医のオリエンテーションの際に，医英検受験の有用性のプレゼンをした。4）医学部1・2回生に対する医学英語のオリエンテーションの際に3）と同様のプレゼンをした。5）英語クラブ主将の学生に直接医英検の意義を説明し，部員に伝えてもらった。6）そのあと，可能性のあると思われる個人にメールを送った。メールは私自身が差出人となり，直接個人宛とした。

受験を勧める際に強調したことは，1）地元で受験できる，2）医英検の資格を得ると，研修病院に応募する際の履歴書に記載でき，選考に際して有利である，3）医学生の海外留学体験の際のTOEIC, TOEFLの点数獲得の代わりに医英検の資格をあてることができる，4）合格のために，日々努力すること自体に意義がある，5）TOEIC, TOEFLはビジネス英語だが医英検は医学英語に特化している点が全く異なる，などである。

結果，4月19日現在，26名が受験を表明した（最終的に受験者数は45名となった）。岡山での施設受験は決定し，最初の一歩を踏み出すことができた。今後施設受験を全国に広げていくため，私自身の経験談を披露し，医英検普及の参考にしていただければと考えている。

3. 日本医学英語検定試験（医英検）2級実施にあたって

伊藤昌徳
（医英検制度委員長，順天堂大学医学部附属浦安病院脳神経外科）

【はじめに】

日本医学英語検定試験（医英検）は，日本の医療・医学の国際化を普遍的に推進することを目的として，日本医学英語教育学会が主催する医学・医療に特化した英語検定試験である。試験では医学・医療の現場で必要とされる実践的な英語運用能力を総合的に評価する。4級は基礎的な医学英語運用能力を有するレベル（医科大学・医療系大学卒業あるいは在学程度），3級は 英語で医療に従事できるレベル（医師・看護師・医療従事者，通訳・翻訳者，等），2級は英語での論文執筆・学会発表・討論，医学英語教育が行えるレベルとして評価する。8月26日に第1回の2級試験が東京医科大学で行われる。

【目的・方法】

第1回および第2回の2級パイロット試験が行われた。パイロット試験の実施状況を供覧することにより2級検定試験実施の参考に供したい。

【パイロット試験実施要項】

筆記試験の解答にあたっては，受験者本人のPCを使用可能である。辞書アプリケーション等，インストールされているソフトウェアも使用可能だが，インターネット接続は不可である。口頭発表（10分間）の後，質疑応答（15分間）を行った。テーマは自由とし，発表用の資料（抄録，PowerPointスライド等）を事前に提出してもらった。

【筆記試験問題と評価】

筆記試験問題（全2問，試験時間：80分）

1．以下の英文を読み，この研究論文のConclusionsを英文（150 words以内）で記しなさい。

2．以下の英文を読み，この研究論文のConclusionsを英文（150 words以内）で記しなさい。

評価法は以下の通りである。

1．論旨・構成 Logic & Structure ：5点満点（合格基準点3点）

2．英語力（文法・スペル等）English Ability(Grammar, Spellings): 5点満点（合格基準点3点）

合計10点満点，パイロット試験では2題出題したため20点満点

【口頭試験と評価】

プレゼンテーション試験

1．　論旨・構成　Logic & Structure

2．　英語力（発音・スペル等）English Ability　(Pronunciation, Spellings)

3．　発表技法（マナー）Presentation Technique（Manners）

4．　発表技法（スライド）Presentation Technique(Slides)

5．　質疑応答 Discussion

一項目5点満点，合計25点満点（各項目の合格基準点は3点）

【合格基準】

1．　筆記試験，プレゼンテーション試験ともに評価点数が60%以上の場合を合格とする。

2．　ただし各採点項目について，7項目中2項目以上で試験官3名の平均が2点以下の場合は上記1.の基準を満たしていても不合格とする。

【結論・展望】

医学英語検定試験2級の本試験を開始するにあたり，予行としてパイロット試験を行い，十分な準備作業を行った。今後の課題としては，受験者数増加に伴い，試験官の増員を図る必要性があることである。医学英語検定本試験試験1級（英語での研究論文の指導，国際学会・会議での座長・議事進行ができるレベルで，これらにおける倫理的指導能力を含む）については2級の実施を重ねた上で実施要項の検討に入る予定である。

【ワークショップ】

EMP Lesson Plans: PechaKucha Style Presentation

Takayuki Oshimi, MD　Eric Hajime Jego　Daniel Salcedo, MD
Jeanette Dennisson　James Thomas, MD
(Nihon University School of Medicine Division of Medical Education Planning and Development)

JASMEE 2012 will be hosting its first PechaKucha style workshop involving a variety of presentations for sharing English for Medical Purposes (EMP) lesson plans on July 21 (10:00-11:30).

For those of you new to PechaKucha style presentation, it is a global presentation phenomenon which started in Tokyo in 2003 by Dytham and Klein, two architects who trademarked the PechaKucha format.
Presentations are 6 minutes and 40 seconds long. According to PechaKucha creators, "PechaKucha 20x20 is a simple presentation format where you show 20 images, each for 20 seconds." The images advance automatically and you talk along to the images. The objective of these simple but tight restraints is to keep the presentations brief and focused to give more people a chance to present in a short period of time. It is a fun and dynamic presentation style with 521 officially designated PechaKucha cites around the world holding regular PechaKucha events. See <http://pecha-kucha.org> for more information.

In this workshop, we will invite 12 speakers to give 3 minute 20 second presentations about their own EMP lesson plans. These presentations will consist of 10 slides (not the typical 20 slides) shown for 20 seconds each. After all presenters are finished, there will be a 30-minute discussion.

Time Schedule:

10:00-10:10:	Introduction
10:10-11:00:	PechaKucha presentations by 12 speakers
	Chieri Noda (Tokyo Medical University)
	Takako Kojima (Tokyo Women's Medical University)
	Timothy Minton (Keio University)
	Clive Langham (Nihon University School of Dentistry)
	Kenneth Nollet (Fukushima Medical University)
	James Hobbs (Iwate Medical University)
	Christine Kuramoto (Kyushu University)
	Alan Hauk (Toho University)
	Jeannette Dennisson (Nihon University School of Medicine)
	Eric Hajime Jego (Nihon University School of Medicine)
	Daniel Salcedo (Nihon University School of Medicine)
	James Thomas (Nihon University School of Medicine)
11:00-11:30:	Q&A, discussion

This creative event promises to be a rewarding experience for all involved where people can have fun sharing ideas and thoughts about their EMP classroom experiences.

一般演題1《医学英語教育プログラム》

座長：小島多香子（東京女子医科大学）, Christopher Holmes（東京大学医学部）

1 A Proposal Regarding English Education at Schools to Train Paramedics/Medical Technologists in Japan

13:10 ～ 13:30 神崎秀嗣 Hidetsugu Kohzaki（京都大学ウイルス研究所細胞生物）

English has not always been a required subject at training institutions for medically related professions because it was not included in the national examinations.

However, "team medical practice", which was devised to overcome the recent lack of physicians, requires paramedics' ability to understand English. English education for paramedics may be useful for providing correct treatment, overcoming the lack of physicians, and treating patients together with several types of paramedics and nurses cooperatively. Therefore, paramedics including medical technologists need English for Medical Purposes (EMP).

This study introduces a trial for practical English education, which has been carried out in our hospital. A curriculum which focuses on English medical terminology was developed, and applied in the classroom. As the results, most of the students showed a high level of satisfaction.

A term-end examination of English medical terminology was conducted, and the scores were compared between students using a paper or electronic dictionary, showing no significant difference. The scores were also compared between students who were taught by native English-speaking teachers and Japanese teachers, again showing no significant difference, indicating the distorted views of older Japanese teachers. The younger generation is more comfortable with foreigners than the older generation, and they have grown up surrounded by computing technology such as computer games and mobile phones, revealing that the students are accustomed to using an electronic dictionary. These results should be used for the improvement of the curriculum.

2 Effects of Extensive Reading on Medical Students' Reading Proficiency, Reading Strategies, and Learning Strategies

13:30 ～ 13:50 大下晴美 Harumi Oshita（大分大学医学部）

The field of medicine progresses daily, and medical professionals should always try to get the latest information about medicine and learn the new methods or techniques of treatment of their generation. If medical students acquire not only medical terminology but also the habit of reading in English in their college days, they will gain the ability to learn from materials written in English for the rest of their lives.

The purpose of this study is to clarify the effectiveness of Extensive Reading (ER) for medical students and the factors affected by ER. The participants (100 first-year medical students at Oita University) were asked to read as many books for pleasure as possible during 30 minute-SSR (Sustained Silence Reading) sessions in class. The scores of pre- and post- reading tests were analyzed to examine how ER contributed to improve students' reading comprehension, speed, and efficiency. The results of Carrell's (1989) and Oxford's (1990) questionnaires were employed to investigate what factors of reading strategies and learning strategies were affected by ER. The results showed that ER helped medical students to improve their reading comprehension, speed, and efficiency. In addition, students could acquire favorable attitudes for learning English and gain some awareness of reading strategies. While this study needs to more closely examine the comparison between ER groups and non-ER groups, these findings elicit specific pedagogical recommendations for ESP (English for Specific Purposes).

3 Creating a New Clinical Medicine English Program

13:50 ～ 14:10 Alan M. Hauk（東邦大学医学部医学科英語学研究室）

This paper describes the problems and successes that the English department at Toho University School of Medicine experienced while creating a new clinical medicine English program for our third year students. The topics of these classes were chosen to mirror what the students were learning in their regular clinical medicine classes, while the teaching materials were created within the department in consultation with the clinical medicine professors. One of the first problems we faced in creating this program was how to design lessons that could be taught by teachers with little or no background in medical English. We initially decided to conduct the classes using a tutorial style in which students would research the assigned topics and make small group presentations. This method was found to have some limitations, though, and in the second semester we switched to a reading and comprehension teaching style that gave more satisfactory results. Another problem was maintaining consistency between classes, which we resolved by rotating the teachers each class session. We assessed the status of this program through teacher debriefings, direct observation of classes, and student questionnaires given at the beginning, middle, and end of the year. This allowed us to update and improve the program throughout the year. The lessons we learned while conducting this program are now being incorporated into our new three-year medical English program, covering the second through fourth years, which began in April 2012.

4 Clinical and Cellular Perspectives of Medical English Education in Japan

14:10 ～ 14:30 Najma Janjua（香川県立保健医療大学）

This presentation looks at medical English education in Japan from clinical and cellular perspectives. The term clinical here refers to the difficulties and complexities in the field that exist and are apparent on the surface analogous to symptoms of a disease. The term cellular on the other hand points to the mechanisms that may underlie those difficulties and complexities analogous to the fundamental causes of a disease that reside at the molecular level in the body cells. In making these analogies, medical English education in Japan is viewed as a system akin to a living organism that is showing abnormal clinical symptoms of a disease. Accordingly, just as to treat the symptoms of a disease, there is a need to explore and understand its mechanisms at the cellular level, it is critical to search and examine the underlying causes of the disease entity in this case as well.† The disease in this case may be named as "Medical English Education Deficiency Syndrome" (MEEDS) that is prevalent on the Japanese archipelago. The major symptoms of the disease may be classified as follows: Poor student motivation; Low general English proficiency; Lack of government policy; Inadequate employment standards; Side-effects from study majors; and EFL milieu related abnormalities. The presentation will look deeper into MEEDS in an effort to understand the mechanisms underlying its symptoms and offer suggestions for managing and ultimately curing the disorder.

一般演題2《実践的医学英語教育》

座長：野田小枝子（津田塾大学）、Clive Langham（日本大学歯学部）

1 Assessing a Scientific English Course with Portfolios and Poster Presentations

14:50～15:10 Christine Kuramoto（Kyushu University, Department of Medical Education），岩城 徹 Toru Iwaki（Department of Neuropathology, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University）

In 2010, we taught the first "Scientific English II" course to the undergraduate third year biomedical science majors. We aimed for specific outcomes that would be helpful in the students' future careers as scientists. The outcomes we wanted to achieve were a poster created from their own research, an effective oral poster presentation, and a portfolio of their progress.

With permission, students used research results from their early exposure lab experience the previous semester. The class followed a step by step series of assignments for students to complete outside of class time each week. The textbook used was *How to write an English medical paper that will be published: A guide for Japanese doctors*, by Amanda Tompson and Naoki Aikawa. Over the 15-week course, the students gradually edited their assignments according to the comments received from peers, teachers, and advice from their lab mentors. Finally, on the last day of the course, students presented their posters at the "Kyushu University Mock International Poster Conference" in the University's Centennial Hall.

The mock international poster conference provided a formative assessment of the course. Grades for the course were based on the oral presentation, the poster itself, and the portfolio. Prizes for the best oral presentation and best poster were chosen by the attendees. Portfolios were assessed on organization and completeness.

The self-evaluation of the students revealed that they were highly motivated, advancing their careers as biomedical science majors through the"Scientific English II" course.

2 Supplementing Medical English Instruction with Automated Classroom Lecture Recording

15:10～15:30 Najma Janjua（香川県立保健医療大学）

A major obstacle to the success of medical English programs in Japanese healthcare education is the low general English proficiency of most Japanese university students. While the reasons for this can be attributed to the way English is taught at Japanese high schools, little help is available for students once they enter university. Consequently, study of medical English poses great challenges for them since it involves reading, comprehending, writing, listening, and speaking using complex medical texts. Accordingly, once a week medical English classes offered at most Japanese universities do not give students enough time for language exposure and to grasp lecture content. In such a scenario, repeated availability of classroom lectures can be of enormous advantage to students. This presentation will describe a study in which a medical English course at a Japanese university was supplemented with automated classroom lecture recording (ACLR). ACLR is a web-based technology that enables teachers to record their lectures and students to view them after the actual lecture period. Lectures were recorded weekly during a 15-week semester and made available for student-viewing at a university designated website. A survey done at semester-end showed that of the 92 students enrolled in the course, 88(96%) had watched the recorded lectures at least once compared to 4(4%) who had not viewed them at all. Those who watched the lectures found them useful to review and understand the material and learn correct English pronunciation. These results point to benefits of supplementing medical English instruction at Japanese universities with ACLR.

3 Experiments in Extracurricular Teaching: The Case of Skills Lab English

15:30～15:50 James Hobbs（Iwate Medical University, Center for Liberal Arts and Sciences）

Success in teaching often requires careful planning. Planning helps ensure that classroom time is used efficiently, that course goals are appropriate and attainable, and that teachers and learners understand both what those goals are and how they are to be reached. However, most teachers can also recount stories of success achieved despite little or no planning, or despite what actually happened being quite different from what had been planned. In this presentation I will describe one such case in the form of an extracurricular class for medical students, named Skills Lab English and team-taught by me and a medical specialist. Inspired by a medical education workshop I attended in 2008, the class began with a vague idea to experiment by offering a small group of eager third-grade students the chance to learn practical medical skills in an English-only setting, by simulating scenarios such as performing CPR, measuring blood pressure, and drawing blood. However, once this avenue had been explored the original plan shifted to a focus first on the role-playing of doctor-patient consultations, and later on case presentations and discussion. Subsequently, various new ideas and chance meetings resulted in being able to offer the students further learning opportunities quite different from those envisaged at the outset. The class has continued to grow in size and popularity and now meets in two groups, each once per month, embracing 17 students from three different grades. The results show that a lack of advance planning was no obstacle to success.

4 看護学生向け「医学英語検定」科目の経年評価

15:50～16:10 杉本なおみ Naomi Sugimoto（慶應義塾大学），鈴木美保 Miho Suzuki（恩賜財団済生会横浜市東部病院）

目的：慶應義塾大学看護医療学部において2009年度より開講されている選択必修科目「医学英語検定」（鈴木　2010）の経時的評価を行う。

方法：無記名質問紙（15項目）を作成し、各年度授業最終回に調査を行った。合計110名（2009年度33名　2010年度43名　2011年度　34名）の回答を得た。

結果：まず，科目内容についての感想を求めた。「本科目を履修してよかった」と回答した学生の割合は初年度の61.8 %から最終年度の79.4%と年を経る毎に増加した。また、教科書（「医学英語検定試験3・4級教本」）のレベルに関しても、「適切」とする者の割合が，69.7%（2009年度）→95.3%(2010年度)→97.1%(2011年度)と上昇した。

さらに、日本医学英語検定試験受検予定の有無について尋ねた。受検の意思がある履修者の割合は2009年度には39.5%、続く2010年度には33.3%と低かったが、2011年度には57.6%と多数を占めるに至った。これらの学生が受検理由として挙げたのは、（1）資格があると将来有利だと思う（「受検予定がある」と回答した学生の55.3 %）、（2）この授業を受けて自信がついた（同17.0%）、（3）必修科目が課されなくなっても英語の勉強を続けたい（同　14.9%）　であった。

一方、受検予定なしと答えた学生に理由を尋ねたところ、（1）当初から受検の意思はない(42.6 %)、（2）合格する自信がない（25.9%）、（3）検定料が高い（14.8%）、（4）時期的に不都合である(13.0%)、（5）試験会場が遠い（3.7%）といった回答が得られた。

考察・結論：調査期間を通じ科目内容自体には大きな変化がなかったにも拘わらず、履修者の満足度が向上したのは、授業形態（例：教員から学生へのより密接なフィードバック）や配布資料の改良が影響したものと思われる。その一方で、履修者の半数近くが単位取得のみを目的とする受講であり、当初から受検意志のない者が多いことが判明した。これらの結果を踏まえ、本科目に関して改良すべき点について論じると同時に、他大学で類似科目を開講する際の注意点についても考察する。

7月22日(日)抄録集

特別講演：国際貢献と医学英語 …… 28
一般演題 3《国際的活動》…… 30
一般演題 4《医学英語読解・ライティング指導》 31
一般演題 5《医学英語研究》…… 32

【特別講演】
国際貢献と医学英語

演者
小川由英
（東京西徳洲会病院）
Yoshihide Ogawa
（Tokyo-nishi-tokushukai Hospital）
座長
植村研一
（松戸市病院事業）

医学英語を簡単に一晩で習得する方法はありません。私の拙い経験をお話して何かのお役にたてれば幸いです。英語の習得がその第一歩であり，一般教養課程の英語の勉強も重要です。医学の基礎科目や臨床科目を学びながら医学英語をどう学ぶか，更に研修医から一人前の医師となってからどのように英語とお付き合いするかなどの問題などに関して何か参考になるお話が出来れば幸いと考えます。

私の人生のスタートは信州の山村で，英語は中学からですが，カタカナで発音をメモした教科書を読む代用教員による指導でした。高等学校でも大学でもESSに参加し，留学生のお世話をしました。そのお蔭で，チュービンゲン大学に留学し，医学生のサマースクールにも参加しました。基礎科目も臨床科目も英語の教科書で勉強し，立川，座間，横須賀の米軍病院にそれぞれ2～3週間エクスターンとして参加し，医師国家試験前にECFMGに合格しました。

研修が終了し，バージニア医科大学の移植外科の臨床フェローとして，腎移植の臨床に携わり，米国医師免許証も取得しました。帰国後，筑波大学と順天堂大学で勤務し，その後，琉球大学に赴任し，アイオワ大学とメイヨークリニックに留学しました。残りの人生何をすべきかを考え，“途上国の医療支援に身を捧げよう”と目標を掲げました。途上国より研究生を招き，大学院生4名，短期の研究生5名を指導しました。また10年間JICAの泌尿器科研修プログラムを毎年実施し，28カ国（アフリカ，アジア，南米）より56名の医師が参加しました。

退官後，徳洲会に就職し，“修復腎移植（病気腎移植）”のプロジェクトに関与することになりました。現在までに修復腎移植10症例が終了し，米国泌尿器科学会，米国移植学会，国際移植学会，アジア泌尿器科学会，国際泌尿器科学会などでの発表を予定しています。また，国際貢献にも関与し，透析の研修をアフリカ（ルワンダ，エリトリア，タンザニア，ギニア，コートジュボアール，モーリタニア，ウガンダ，トーゴ）やネパールの医師，看護師，技師を対象に実施しています。

［演者略歴］

東京西徳洲会病院常勤顧問（腎臓病総合医療センター長代行，泌尿器科部長代行）。琉球大学名誉教授。ドイツ国チュービンゲン大学留学，米軍立川，座間，横須賀エクスターンを経て，慶應義塾大学在学中に米国ECFMGに合格。卒業後，慶應義塾大学で小児科と泌尿器科を研修後，米国Medical College of Virginia移植血管外科フェロー（バージニア州医師免許証取得），筑波大学臨床医学系講師，順天堂大学医学部助教授，琉球大学医学部教授を経て現職。

文部省研究員として，アイオワ大学とメイヨークリニックに留学。琉球大学にてJICAプロジェクトの泌尿器科臨床研修を10年間実施。また臓器移植対策の功績に対し厚生労働大臣表彰を受ける。日本泌尿器科学会理事，日本老年泌尿器科学会評議員，日本小児泌尿器科学会評議員，日本内視鏡学会評議員，日本移植学会評議員，日本性機能学会評議員等，多くの学会で要職を歴任している。

一般演題3《国際的活動》

座長：五十嵐裕章（河北総合病院）, Timothy Minton（慶應義塾大学医学部）

1 島根大学医学部における「ニュージーランド海外医学・看護研修」の実践報告

9:20 ～ 9:40　岩田　淳 Jun Iwata
（島根大学医学部医療社会文化学講座）

島根大学医学部では、平成１７年度より「日本版WWAMIEプログラム」と称した海外医学研修プログラムを実施してきたが、平成２１年度以降、新たに１・２年生を対象としたニュージーランドにおける海外研修を開始し、これまで３回実施した研修に、計50名の医学科生と看護科生が参加している。

毎年３月、２週間の期間でニュージーランド・ハミルトン市にあるWaikato Institute of Technology（以下「Wintec」）にて実施している本研修は、本学部の教員（専門、英語）、Wintecの英語学部、健康学部、国際交流センターのスタッフによる入念な事前打合わせのもとで立案され、プログラムに、英会話、医療英語演習の他、診療所、病院、ホスピス、高齢者施設、助産施設、血液センター等の医療施設の見学、ホームステイ体験、留学生との交流が含まれ、参加者にとっては実践的英語コミュニケーションの向上と、海外における医療について学習する貴重な機会となっている。

島根大学医学部では、平成23年度には、こうした海外研修への学生の取組を評価するとともに、今後海外研修への積極的な参加を促す目的で、新規に自由単位「海外研修A、B、C」を開設し、今後さらに海外研修に力をいれていく計画である。

本発表では、これまで３か年実施してきたニュージーランドにおける海外研修について、研修開始の経緯、目的、準備状況、プログラム内容を紹介するとともに、参加者のアンケートによる評価結果と今後の課題について報告する。

2 Training Future Doctors for Overseas Clinical Clerkships at Toho University

9:40 ～ 10:00　Daniel Salcedo（Nihon University School of Medicine）

Introduction: The purpose of the Toho University Clinical Skills Course (CSC) is to prepare medical students participating in clinical clerkships at hospitals located outside Japan. The 2011 course was the 3rd time this yearly course was offered at Toho Medical School.

Methods: A total of ten 5th year medical students met the criteria for enrolment in the CSC. Participant selection criteria included advanced spoken English skills, high motivation, and outstanding academic record.

The course consisted of 180-minute sessions followed by 30 minutes of participant led Q&A and was delivered every weekend during 7 weeks, for a total of 24.5 hours of training. The topics covered included communication strategies, rapport development, history taking, physical examination, diagnostic discussion, patient counseling and clinical note writing.

Each session included comprehensive guided-practice activities, facilitated by the use of simulated patients (SPs). SP's provided case simulations and feedback regarding layman language use. The final evaluation consisted of 15-minute SP encounters.

Results: All 10 students successfully met the achievement standards. While 4 students performed flawlessly, the remaining 6 students made grammatical errors without any major impact on the outcome.

Discussion: The CSC appears to be an effective way to train preselected students in a small size group setting. Student motivation and active participation are necessary to achieve a successful outcome.

Finalizing the course, all students demonstrated good proficiency in managing English speaking patients in a time efficient and culturally sensitive manner, at a level compatible with patient clinical interaction in North American hospitals.

3 EMP Education in Germany — Results of a Preliminary Survey

10:00 ～ 10:20　Daisy E. Rotzoll（University of Leipzig, Dept. of Medical Education, LernKlinik Leipzig）

Introduction: In Germany, EMP is not a curricular subject in medical education. At the 36 Medical Faculties existing, diverse strategies have been implemented to promote Medical English Education.

Materials and Methods: An EvaSys-based questionnaire was developed and sent to all German faculties to elucidate the situation with the following questions: 1) How is English for Medical Purposes offered to your medical students? 2) Are the teaching units offered obligatory or not? 3) Which institution at your university offers these courses? 4) Who teaches these courses? 5) At which stage of his/her medical education can the student patricipate in these courses?

Results: The results show a very heterogeneous picture of Medical English Education in Germany. While at many universities language centers are involved in Medical English Education taught by linguists, only very few institutions combine medical personnel with linguists in teaching. As to our knowledge, no longitudinal curricula in EMP exist in Germany.

Discussion: Together with the MFT (Medizinischer Fakultaetentag) in charge of curricular development at German medical faculties, possibilities to develop a coordinated curriculum in EMP are under discussion.

4 The Rise of Asian ELF (English as a Lingua Franca) and its role in Medical English Education

10:20 ～ 10:40　Michael Guest（University of Miyazaki, Faculty of Medicine）

Japan is often viewed as an 'outlier' in terms of active participation in the world of specialized English discourse. Even though Japanese doctors and medical researchers are aware of the need to produce research, deliver presentations, and engage in symposia in English many Japanese medical professionals feel at a disadvantage since the language has little or no historical basis in Greek/Latin lexis, syntax, or rhetoric. As a result, many are hesitant to participate in international clinical settings or symposia fearing that much will be 'lost in translation'.

This presentation introduces a model based current Asian ELF (English as a Lingua Franca) research which attempts to synthesize a common Asian English, one independent from European or Anglo-American models of English.

It will be demonstrated how an Asian ELF might be seen as more user-friendly by Japanese medical and nursing students and may also as a means of reducing the sense of distance and disadvantage that many Japanese medical practitioners feel towards the English language. It will be demonstrated that when an Asian ELF is used as a model, English is not as psychologically, sociologically, cognitively, or even syntactically as distanced from the Japanese discourse as it is often believed. In fact, it will be argued, it actually complements Japanese discourse norms, particularly so in specialized domains such as medicine.

By reducing the sense of 'otherness' between Japanese native speakers and English this approach can help to reduce the supposed negative impact of being historically removed from Anglo-American cultural and linguistic traditions.

一般演題4《医学英語読解・ライティング指導》

座長：福澤嘉孝（愛知医科大学），Christine Kuramoto（九州大学医学部）

1 A Prescription for Clarity and Consistency in EMP

13:00 ～ 13:20 Ian Willey（香川大学 大学教育開発センター）

English instructors teaching English for medical purposes (EMP) courses often lack experience in medical disciplines. Determining which writing skills to teach students can thus be difficult. This study attempted to identify important writing skills for students in medical fields by comparing revisions made to English abstracts by English teachers and healthcare professionals.

Participants included 70 native English speakers, comprising two main groups: English teachers at Japanese universities and healthcare professionals (medical doctors and nurses). All participants edited and reflected on an English abstract written by a Japanese nursing researcher. Revisions were examined qualitatively, and differences across groups were analyzed statistically. Attention was paid to revisions affecting definite articles and lexical cohesion.

Results indicate that the English teachers made significantly more revisions affecting definite articles than the healthcare professionals; English teachers also added definite articles significantly more often than the healthcare professionals. Moreover, an examination of revisions affecting lexical cohesion revealed that healthcare professionals held a greater concern for using terms consistently, by not substituting synonyms or pronouns. Reflections written by healthcare professionals also revealed a greater concern for sentence clarity.

EMP instructors should be aware that healthcare professionals are less concerned with correct article usage than English teachers, and that use of the definite article may be restricted in medical writing. Furthermore, students may benefit from writing tasks that develop students' ability to use terms consistently, rather than display vocabulary knowledge. Tasks that encourage students to write simple and clear sentences may also be beneficial.

2 医科学・生命科学系大学院における Progress Report の指導

13:20 ～ 13:40 幸重美津子 Mitsuko Yukishige（京都大学再生医科学研究所）

本発表においては、医科学、生命科学系の大学院博士課程の研究者を中心とした実験 Progress Report のための個別トレーニングの実践報告を行う。発表者は数年来，国立および私立大学大学院において、パワーポイントを用いた実験 Progress Report の英語による発表の指導を行ってきた。Progress Report は研究発表の基となる、各個人の実験結果および実験の進展状況の発表であるため、実践的な指導は個別のトレーニングとなる。対象は大学院生、ポスドク、助教等であるため、学習者の当該分野に関する専門性は非常に高い反面、英語の実践的運用能力は、必ずしも優れているとは言えない。研究発表とも lab talk とも異なる Progress Report の位置づけを理解させ、適切な動詞の選択や専門用語の正しい発音を改めて意識させる必要がある。

一方で、当該分野を専門としない英語教員が個々の研究内容に踏み込むことは容易ではないばかりか、不可能に近い。そのため、事前に実験内容や実験結果の相互の関連についてのカウンセリングを行わなければ、対象学習者が意図した発表内容や表現の指導に的確性を欠く可能性も否定できない。それゆえ、Progress Report というジャンル特性を充分に理解すること、そして専門分野にまで踏み込む必要のない（深山、2010）ESP 教員として、当該分野の専門教員と密接な連携を取りながらその役割を果たすことが必要不可欠となる。

本発表ではポスターセッションや研究発表の基となる実験 Progress Report の、2つの指導時間の異なった個別トレーニングの実践報告を行い、より効果的なトレーニング法の提案を行うことにする。

1．目的：実験 Progress Report の実践的個別トレーニング
2．対象：医科学、生命科学系の大学院生、ポスドク、助教
3．ターゲットスキル：パワーポイントを使用した英語によるプレゼンテーションスキル
4．授業報告：
　1）国立大学院再生医科学研究所 A
　　トレーニング時間：1回 30 分/約 2 ～ 3 weeks
　2）私立大学総合生命科学部大学院 B
　　トレーニング時間：1回 90 分/約 8 ～ 10 weeks

3 Lead, Follow, and Get Out of the Way

13:40 ～ 14:00 Kenneth E. Nollet（福島県立医科大学輸血・移植免疫学講座），高橋英恵 Hanae Takahashi（福島県立医科大学企画財務課）

First-language English speakers at Japanese medical universities may receive ad hoc requests pertaining to international conference presentations. Assistance might begin — and end — with editing an abstract, but the reputation of an individual and an institution will be influenced by presentation quality. Those of us who live in Japan by choice can have a constructive impact on how our colleagues and institutions are perceived, provided that our help is welcome and of good quality. This report concerns a hospital vice president with whom the first author has had a mutually beneficial working relationship since 2008. We attend the same regional and national specialty conferences in Japan, and have traveled to New Zealand to make conference presentations and visit nearby healthcare facilities. Most recently, the author could not attend a conference of mutual interest in the United States, but provided preparatory and real-time support to facilitate conference participation, networking with international colleagues, and site visits in two states. Although the author is a pathologist with subspecialty certification in transfusion medicine, these credentials are not essential, as other JASMEE members can attest. First-language English speakers with a sincere interest in at least one medical subject area, academic conference experience, and some networking savvy can be of value to Japanese medical colleagues traveling overseas.

4 講師の専門領域に合わせたインタラクティブな論文抄読演習

14:00 ～ 14:20 久留友紀子 Yukiko Kuru，山森孝彦，玉腰暁子*，安田宗義，近藤文雄，高木秀和，三鴨廣繁，岩瀬 敏，渡辺秀人，小西裕之，池田 洋，柴田英治，雑喉正泰，林 省吾，福沢嘉孝（愛知医科大学医学部，*北海道大学大学院医学研究科）

本学では英語文献から医学情報を抽出する力を養成する授業（科目名「ジャーナルクラブ」）を 2005 年に開講し，隔週でグループ学習による論文抄読演習を行なってきた。従来は各グループに基礎医学・臨床医学の教員がチューターとして入り，グループ毎に指導及び評価を行う方式をとっていたが，共通課題論文の内容と各チューターの専門領域との乖離や，チューター間の評価のばらつきといった問題があった。そこで 2010 年度に授業方式の大幅な見直しを行い，チュートリアル教育のメリットであるグループ学習や講師とのインタラクションを残しながらも，課題論文の内容を専門分野とする講師から解説を聞くことができる指導方式へと転換をはかった。

本発表ではこの新方式の論文抄読演習について実践報告をする。新方式では，年間 5 回行う各セッションで毎回 1 名の異なる医学教員が講師となり，2 名の英語教員が仲介役を務めながら 100 余名の学生に対してインタラクティブな論文抄読演習を行っている。新方式の主な特色は以下の 4 点である。

1. 講師となる医学教員の専門領域からの課題論文：教材となる課題論文は，講師の専門領域の中から 2・3 年生が理解可能な短い医学論文を選択する。
2. 携帯メールを利用したインタラクション：学生 4 名ずつの小グループで話しあった質問事項をグループの代表者が携帯メールで送信する。これを英語教員が集約して講師の医学教員へ転送する。
3. 英文読解指導：グループ学習で出された質問事項のうち英文読解に関するものは，翌週に英語教員が解説と演習授業を行なう。
4. 論文の解説講義と小テスト：翌々週に講師の医学教員が論文について全体講義を行う。グループ学習で出された質問のうち論文内容に関する質問はこの講義の中で解説される。講義直後に論文及び講義の理解度を確認する小テストを実施する。

一般演題5《医学英語研究》

座長：伊藤昌徳（順天堂大学医学部附属浦安病院），鈴木光代（東京女子医科大学）

1 The One-or-Two-Letter and Three-letter Words

14:40 ～ 15:00　Christopher Holmes（University of Tokyo Faculty of Medicine）

The indefinite and definite articles, "a" (or "an") and "the," are among the basic elements of English grammar. If, in the Japanese language, "wa" and "ga"（は・が）are occasionally regarded by the uninitiated as "mysteries of the Orient," perhaps the definite and indefinite articles of English also deserve the status of divine mysteries. But I don't think so...

The two pairs, the/a and wa/ga, do present a – ahem... – "definite" family resemblance above and beyond their resistance to being easily explained; both are somehow too self-explanatory to merit being explained or taught to native speakers, and their differences are rarely, if ever, taught in schools.

And yet "a" and "the" are essential, and like other basics, they are given short shrift in the teaching of English in Japan. (Are they ever covered in exams in Japan?)

Why is that so? Must one be a native speaker to understand and use them properly? I will attempt both to explain why the definite and indefinite articles merit our and our students' attention and to demonstrate how teachers can meet the challenge of explaining their meaning and usage to learners of English.

2 ライフサイエンス・医療系の研究論文のムーブ分析と e-learning への応用

15:00 ～ 15:20　スミス朋子 Tomoko Smith（大阪薬科大学），野口ジュディー津多江 Judy Noguchi（武庫川女子大学薬学部）

ESP (English for Specific Purposes)において、ジャンルの概念（ムーブ分析）を教育に応用するのであれば、二つのことに注目する必要がある。第1はムーブ（論の流れをつくるための特定の情報のまとまり）の流れで、第2はそのムーブをつかさどる言語特徴である。ムーブ分析により、その流れと言語特徴が特定できれば、それらを効果的に習得できる教材を作成していくことが可能である。

本発表では、医療分野に必要不可欠なジャンルのひとつである研究論文の読解・作成指導に利用できる e-learning 教材の開発過程を理論面から述べる。英語教員・言語学者の立場から研究論文のムーブ分析を試み、教材としてどのような特徴を教えるべきかを検討する。特に、ムーブの流れと動詞の用法に関する質的な分析結果から日本人大学生・大学院生対象の教材としてふさわしい内容を考察する。

ムーブ分析は、ライフサイエンス・医療系で実際に学会誌に掲載された論文を用いて行った。Summary, Introduction, Experimental Procedures, Results, Discussion を含む4つの論文から約300の動詞を抜粋し、時制の使われ方やそれらの動詞を含む文や節が示すムーブ等を詳細に分析した。本発表では、特にこれまでの研究ではあまり取り挙げられていない Discussion セクションに焦点を当てる。分析の結果、他のセクションよりも Discussion の時制の用いられ方がより複雑であることが明らかになった。また、全体を通して、論を進める際に分詞構文が効果的に使われることも分かった。ムーブの種類と流れについては、野口他（2007）で工学系の学生のために提案されたものを基にして、ライフサイエンス・医療系のジャンル用に適用したものを紹介する。一見難解と感じられる本物の英文素材であっても、ムーブ分析を応用することで研究論文の言語特徴の理解を促す指導ができることを提案する。

野口ジュディー・深山晶子・岡本真由美（2007）『理系英語のライティング』ALC

3 学術論文コーパスを利用した専門的語彙リスト作成の試み

15:20 ～ 15:40　藤枝美穂 Miho Fujieda（京都医療科学大学）

効果的な語彙リストは教材やテスト作成の指針となるばかりでなく，学習者の自律学習の助けともなり，カリキュラム策定の資料としても有用である。専門領域における英語学習を生涯にわたる学びの機会と捉えるなら，大学1年次から卒業そして就職後の専門家としての継続学習までを視野に入れた，専門度が異なる段階的な ESP 語彙リストを分野を特定して作成することが，学習者の成長とともに変化するニーズに応える手がかりになると考えられる。

本研究では，目標とする英語を明確にする意味で，専門性の最も高い段階と考えられるジャンル，すなわち当該分野の最先端の研究結果が発表されている学術専門誌の研究論文のコーパスを分析の対象とし，放射線技術学を学ぶ大学学部生が将来専門家として習得すべき語彙とはどのようなものなのかを探った。当該分野における学術専門誌 Radiology に掲載された282論文をコーパス化して13のサブコーパスに分類し，語の頻度(frequency)と分布(range)，および単語連鎖(lexical bundles)を調べた。その結果，lesion, transverse, coronal など，一般語としては非常に頻度が低い単語がこの分野では頻出し特徴語となっていること，さらに "in a year old", "study was approved by", "multi detector row CT"などの特徴的な4-gram の存在など，この分野の言語特徴が浮き彫りになった。

第8回 Kenichi Uemura Award (植村研一賞)授賞式

【受賞者】James Hobbs

James Hobbs is an associate professor in the Center For Liberal Arts and Sciences at Iwate Medical University.

He was originally hired as a lecturer in the former School of Liberal Arts and Sciences, teaching mainly first-year students of medicine and dentistry. With the expansion and reorganization of IMU in 2007, including the opening both of the Yahaba campus and of the School of Pharmacy, he was charged with creating and implementing a coordinated English conversation programme in which classes of 70~120 students are each divided into four groups, each group taught by four different teachers over a 28-week course. He now also teaches a range of ESP courses for second-, third-, and fourth-grade students, focusing on technical terminology and professional communication. With a research background in Task-Based Learning, he is a firm believer in the importance of facilitating meaning-focused student-student classroom interaction in English, whether in the form of simple communicative activities, or presentations and other projects requiring detailed preparation. In close collaboration with a professor in the medical school, he also runs an extra-curricular course named Skills Lab English in which small groups of students are taught practical career-related skills in an English-only environment. In April 2012 he became head of the Department of Foreign Languages, and he is looking to further develop his collaborative activities with specialist staff in IMU's three schools in order to best meet students' English needs.

1991 graduated from the University of Kent at Canterbury, UK, Bachelor of Arts in Economics with French
2003 graduated from Aston University, UK, MSc TESOL

Selected publications:

Hobbs, J. (2005). Interactive lexical phrases in pair interview tasks. In C. Edwards & J. Willis (Eds.), Teachers exploring tasks in English language teaching (pp. 143-156). Basingstoke: Palgrave MacMillan.

Hobbs, J., & Masuda, T. (2010). Role-playing medical scenarios: A student-centred approach to the integration of content and language learning. Annual Report of Iwate Medical University Center for Liberal Arts and Sciences No. 45, 73-82.

Hobbs, J. (2011). Practical steps towards task-based teaching. In A. Stewart (Ed.), JALT2010 Conference Proceedings. Tokyo: JALT.

Communicative Activities for Medical Terminology Classes

James Hobbs (Iwate Medical University)

Medical students are often required to take lessons or even whole courses focusing on the common prefixes, roots, and suffixes encountered in medical terminology. While many teachers would agree that this is an important component of the medical English curriculum, teaching it in a way that engages learners' interest can be a challenge. Terminology textbooks typically include long lists of word parts, written exercises to practice combining these word parts, and little else, and courses based entirely on such materials can soon become dull, monotonous, and hence demotivating. In addition, such materials often incorporate little or no focus on pronunciation.

In this presentation, the speaker will describe a number of communicative activities he has created and used successfully in conjunction with a medical terminology textbook. By ensuring that each 90-minute lesson features at least one speaking and listening activity with an element of challenge and competition, it has been possible to keep students engaged and motivated for the duration of a 15-week course in medical terminology, and the use of such activities also appears to have helped students develop both better pronunciation habits and a better command of the textbook material.

日本医学英語教育学会
学術集会一覧

回	会長	開催期日	開催会場
第１回	植村研一	1998年7月11, 12日	アクトシティ浜松コングレスセンター
第２回	小林充尚	1999年8月9, 10日	日本教育会館
第３回	平松慶博	2000年7月8, 9日	こまばエミナース
第４回	大木俊夫	2001年8月4, 5日	こまばエミナース
第５回	清水雅子	2002年8月3, 4日	川崎医療福祉大学
第６回	小林茂昭	2003年7月12, 13日	こまばエミナース
第７回	大野典也	2004年7月10, 11日	東京慈恵会医科大学
第８回	西澤　茂	2005年7月9, 10日	こまばエミナース
第９回	大瀧祥子	2006年7月15, 16日	ウェルシティ金沢（石川厚生年金会館）
第10回	大石　実	2007年7月14, 15日	メトロポリタンプラザ
第11回	佐地　勉	2008年7月12, 13日	笹川記念会館
第12回	亀田政則	2009年7月18, 19日	福島県立医科大学
第13回	菱田治子	2010年7月3, 4日	聖路加看護大学
第14回	吉岡俊正	2011年7月9, 10日	東京女子医科大学
第15回	安藤千春	2012年7月21, 22日	ホテルグランドヒル市ヶ谷
第16回	伊藤昌徳	2013年7月20, 21日(予定)	東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート(予定)
第17回	西村月満	2014年7月19, 20日(予定)	

Journal of Medical English Education Vol.11 No.2 2012年6月1日発行 第11巻 第2号 編集人 リューベン・M・ゲーリング，吉岡俊正 / 発行 日本医学英語教育学会 / 発売 メジカルビュー社

Journal of Medical English Education **Vol.11 No.2**

日本医学英語教育学会会誌
2012年6月1日発行　第11巻 第2号　頒価1部3,000円

編集人　リューベン・M・ゲーリング，吉岡俊正
発行　日本医学英語教育学会

発売　メジカルビュー社
〒162-0845　東京都新宿区市谷本村町2—30
TEL 03-5228-2274／FAX 03-5228-2062／E-MAIL jasmee@medicalview.co.jp
(年会費には本誌の購読料を含む)

印刷　三美印刷株式会社